

教育支援センター「であい塾」の支援拡充の取組

高山市教育委員会 学校教育課



【であい塾の全景】

1. はじめに

「であい塾」とは、高山市の教育支援センターの名称である。平成2年に設置された教育支援センターは、場所や名称を変えながら、令和元年に設置30年という節目を迎えた。30年の間には、のべ約700名の小中学生が通い、教科の授業をはじめ、様々な行事や体験活動等、自己実現につながる貴重な体験を積むことができた。それらを支えたのは、教育相談員や学校関係者、保護者、有志の方々、地域の方々や34にもものぼる支援団体である。

この節目の年に「適応指導教室『であい塾』30年を振り返る会」を開催した。今はもう社会人となっている1人の卒塾生が「であい塾は僕の居場所だった。人に感謝する心、人とつながることの大切さを教えてもらった」と参加者の前で語った。

高山市の教育大綱及び第3次教育振興基本計画において、「子どもの居場所づくり」は喫緊の課題であり、学びの保障も含め高山市のすべての子に保障されるものであると示している。そこで、「であい塾」が、不登校の児童生徒の居場所、学力の保障としてより支援が行き届くよう「であい塾の全市的な展開」を試みることにした。

2. であい塾の全市的な展開に向けて

(1) であい塾の全市的な展開検討委員会の設立

日本一広い高山市で、であい塾は市街地から離れたところにあるために、スクールバスを運行し通塾を支えている。児童生徒が通いやすいよう運行経路については柔軟に対応しているが、市内全域をカバーすることはできないため、保護者の送迎で通う子もいる。

保護者の送迎が困難な場合やであい塾に来ることに抵抗のある子には、相談員が子どもの自宅近くの市役所支所に出かけて話をしたり学習支援をしたりしている。このように、その子に応じた支援を行えば、であい塾への通塾等が可能になり、学校への登校につながったり自分の居場所を見つけたりすることができる子が増えるのではないかと考え、令和2年度より「であい塾の全市的な展開検討委員会」を設立し、支援の拡充を目指すことにした。

- ・委員 であい塾友の会代表、子ども発達支援センター、SC、校長、教頭、教育委員会事務局、
であい塾相談員等
- ・会議数 年3回 1回目(6月25日)・2回目(11月19日)・3回目(2月17日予定)

(2) 第1回検討委員会で確認された課題

- ・通塾や登校につながるような移動であい塾(市役所支所に開設)の在り方
- ・進学等のために学習保障を望んでいる生徒への対応

- ・小、中学生別の支援を望んでいる児童生徒への対応
- ・個に応じた支援の見極めの在り方

(3) であい塾の実践

上記の課題について、次のような実践を試みた。

a : であい塾を離れての支援

○であい塾相談員の家庭訪問

- ・H29は34件、H30は54件、H31は105件、R2は80件（12月末現在）と年々増加している。家庭訪問により信頼関係を築くとともに、登塾刺激等の必要性をつかむことができた。

○移動であい塾開設（市役所支所の一室に開設）

- ・高校進学希望のあるA君に、B支所に相談員が出向くことを伝えると、計3回一緒に活動し、その後、であい塾本館に母と登塾することができた。さらに、学校に登校する意欲がわき、現在はであい塾を時折利用しながら、学校への登校も可能となっている。

○登校サポート

- ・C中学校D君は、であい塾のスクールバスの乗り場を学校の校門に設定し、職員室で挨拶をしてからスクールバスに乗ることを決めた。であい塾活動後スクールバスで帰宅する際、学校前で降り、そのまま放課後の学校で学習することもできるようになった。
- ・登塾した後、相談員の送迎で学校に行く児童生徒もおり、個に応じて対応している。

b : オンラインによる支援

○タブレット（寄贈）の活用

- ・E中学F君は、であい塾からWEBで担任の先生と会話をすることができた。
- ・自宅から出られない子については、自宅とであい塾をWEBでつないで学習支援を試みている。

○であい塾の相談員と保護者との懇談

c : 個別学習の保障

○小・中学校別、個別学習に対応できる学習室を2部屋用意

- ・個に応じ、タブレットを活用し、学習を進めている。

○中学校教諭が授業を実施

- ・であい塾に通塾している生徒に対し、毎日、国語と数学の授業を専科の教諭が実施している。生徒は自分の進度に合わせた学習によって予習や復習をするようになった。

d : 専門家の知見

○公認心理師による支援の見立て



【WEBによる懇談】



【公認心理師を招いた懇談】

3. 終わりに

第2回の検討委員会においても、実践から課題を導き出し、次の継続的な実践に結び付けている。今後の重点は「学びの保障」と考え、新たな学習室を活用し、より個に応じた学習支援ができるよう取り組んでいるところである。